# 經濟論叢

第124巻　第5・6号

## 河上　肇生誕100年記念号


福田徳三と河上　肇……杉　原　四　郎　1

初期河上における経済政策論……大　野　英　二　21

河上　肇の「国家論」小考……住　谷　一　彦　50

漢詩人河上　肇の旧蔵書……一　海　知　義　65

河上　肇と「加算と減算」……高　寺　貞　男　87

『改版社会問題管見』序文……山　之　内　　靖　99

財政問題よりみた河上　肇「貧乏物語」……池　上　　惇　104

河上　肇における科学と宗教と哲学……吉　田　　光　120

資　料

京都大学時代の河上　肇……細　川　元　雄　141

経済学会記事

経済論叢　第123巻・第124巻　総目録


昭和54年11・12月

京都大學經濟學會

# 福田徳三と河上肇

杉　原　四　郎

## I

福田徳三（1874.12.2—1930.5.8）と河上肇（1879.10.20—1946.1.30）とは，同時代人として共に当時のわが国の代表的な経済学者であった。すなわち福田は河上より5年早く生れ，わが国の経済学界への登場も5年早い——福田の処女作（ブレンターノ）との共著『労働経済論』は1899年12月刊，河上の処女作『経済学上之根本観念』の刊行は1905年1月である——が，福田が1930（昭和5）年に病歿してから後約2年間は河上の研究者としての生活がつづいたので，今世紀の最初の3分の1期を彼らは経済学者として活躍したのだが，その間の日本経済学界を代表する経済学者を二人えらぶとなれば，おそらく多くの人々は福田と河上とをあげるであろう[1)]。

福田と河上とが客観的に見てこの時代の代表的経済学者であったのみならず，彼等自身がたがいに他を最も重要な経済学者として認め合い，相手の業績を吟味しつつそれを自分の成長の糧とするというかたちで，種々の論争を展開した論敵であった。1902年東大法科大学政治学科を卒業し，大学院で経済学の研究をはじめた河上肇は，学界の先輩でドイツ留学（1897—1901）から帰ったばかりの福田の諸著作から多くを吸収しつつ，いわば福田の胸をかりて研究をすすめていったが，福田もまた郷里も出身学校もちがうこの新進学徒の業績にいち

1）福田は幕末以来の日本経済学史を4期にわけ，(1)神田孝平と福沢諭吉とに代表される輸入時代，(2)田口卯吉と天野為之とに代表される啓発時代，(3)和田垣謙三と金井延とに代表されるドイツ経済学導入時代，(4)現代すなわち福田の時代としている（福田『経済学全集』IV，同文館，大正14年1442-1443ページ）が，福田のいわゆる第4期を代表する経済学者が彼自身と河上肇とに他ならなかった。この点については杉原「日本経済学史上の河上肇」，『経済』1979年12月号参照。

はやく注目した。たとえば福田は，河上が大学を卒業した翌年の1903(明治36)年8月に『国家学会雑誌』に発表した「経済学上の根本問題に関し現代諸大家の学説を評して自家の所見を述ぶ」に対し，河上に批判された者の一人として早速筆をとり，同年10月の『国家学会雑誌』に「経済と経済行為の概念に関する誤謬」の中で河上説を反批判した[2]。福田が河上に関心をよせた理由としては，一つには河上の研究の姿勢が，一方では経済史や経済政策の領域で仕事をしながら，他方では経済理論の研究に当初から強い興味をしめしているという点に福田自身の姿勢とよく似たものを見いだしたこと，また一つには植村正久の影響をうけたクリスティアンとしての福田が内村鑑三の影響でバイブルをよんだり伊藤証信の無我苑にとび込むというような宗教心の強い河上に親近感をおぼえたことが考えられよう[3]。

明治30年代の半ばにはじまった両者の接触は，社会政策学会という共通の広場で一層ふかまるが，それは河上が1908年に京大に赴任してからもかわらず，福田が入洛する時は河上の家に泊ることもある[4]ほどであったが，総じて河上が外国留学（1913—1915）を終えて帰朝するまでは，福田の方が後輩の河上に対して主導的な立場にあったといってよい。ところが河上が留学中の1914年に法学博士となり（福田はすでに1907年に学位を得ていた），1915年に教授に昇進，さらに1916年に『大阪朝日新聞』に連載し1917年に出版した『貧乏物語』で文名を天下に馳せてからは，両者の立場はほぼ対等となり，さらに河上が1919年に『社会問題研究』を創刊してマルクス主義への傾斜を明確にするにつれて，両者の思想的立場のちがいが顕在化するとともに，社会への影響力も河上の方が福田のそれを——堺利彦のいわゆる「福田時代より河上時代へ」——

2) 河上肇は『経済学原論』上巻（明治39年）の中でこの福田論文の河上への批判の部分を引用し，それに対しやはり経済行為の動機を自己の欠乏感覚の除去にもとめる自説をまげることはできないとのべている。99-100ページ参照。なお同書の例言をも参照。

3) このような理論的な問題についての論争の他に，米穀問題といった時論的問題についても明治38年に両者の間に論争がかわされたが，この点については本誌所載の大野英二教授の論文を参照されたい。なおこの二つの論争は後掲の天野敬太郎による論争目録にはあげられていない。

4) 福田「戸田博士を憶ひて」，『経済論叢』第18巻第4号，大正13年4月参照。なお，細川元雄氏の調査によれば，福田は京大の経済学読書会で報告したこともある。本誌151ページ参照。

超えるようになる。こうして1920年代以後には彼らの学問的論争にもイデオロギー的対立がからまるようになり，時には感情的な言葉さえ投げ合われることもあった。とはいえ多年にわたる研究上の交流にもとづく友情は，基本的には両者によって最後まで持ちつづけられることは，Vで見る通りである。

こうした福田と河上との間の約30年にわたる学問的交流をたどってゆく場合の手がかりとなる資料を，三つ紹介しておくことにしよう。第一は天野敬太郎編『河上肇文献志』の「論争目録」である。そこには河上がおこなった33の論争が列記され，おのおのについての関係文献がかかげられているが，その中には，1909～1910年の「経済学研究法」論争から1927～28年の「マルクス『資本論』」論争にいたるまで7種の福田・河上論争がふくまれている。本稿でのべるように，福田・河上論争はこの7種の他にもあり，またここにあげられている論争の関係文献も若干の補充を必要とするであろうが，この目録は両者の長きにわたる学問的交流を概観するうえに有益である。第二は1925～26年に福田みずからが編集・刊行した『経済学全集』（全6巻）の索引である。この索引は人名，書名，件名の三つにわかれ，各巻の末尾にある他，別巻の総索引にまとめられている。いま総索引の人名索引をみると，日本人の中では河上肇がその頻度数において最も高いことがわかる。この人名索引をつかって書名および件名索引をも参照しつつ本文を調べてゆくと，福田の研究の中に河上がどのような位置をしめているかがうかび上ってくる。河上肇の『著作集』（全12巻，筑摩書房，1964～65年）には索引がないので河上の側からは同じ作業ができない。第三に大阪市立大学経済学部所蔵の福田文庫にある河上の著作と京都大学経済学部所蔵の河上文庫にある福田の著作とである。相互に贈呈され，相手に読まれた跡が見られるこれらの著作は，両者の学問的交流をしめす資料としてわれわれにのこされている[5]。この場合はさきの『全集』と『著作集』との場

5）河上文庫には福田の著作が十数点（その大部分は著者寄贈本であることが確認される）あるが，その中で刊行年の最も古いものは『経済学研究』（改訂増補第4版，明治42年）で，見返しに「御叱正・河上学兄・44年盛月・福田徳三」とある。また最も新しいものは『経済学全集』（全6巻，大正14—15年で）で，第1巻（大正14年）の見返しに「拝呈・在白耳義帝国大使館福田徳三」とある。『河上肇文庫目録』（1979年）参照。冊子目録が公刊されていない福田文庫の方↗

合とは逆に，河上文庫の方に総目録が刊行されているのに対して福田文庫に未だそれがないという状態である。

これらの資料を使って福田と河上との関係を明らかにしてゆくこと[6]は，福田の研究や河上の研究にとってはもとより，明治・大正・昭和にわたる日本経済学史の研究にとっても重要な意義をもっている。だがこうした作業はまだ緒についたばかりで，本格的な調査と分析とは今後にのこされているといってよいであろう。本稿はそのための準備作業の一つとして，主としてさきにあげた第二の資料をつかいながら，福田が河上の業績をどのように評価しているかを調べた結果をとりまとめたものである。

## II

本節では河上の外国留学以前の諸著作が福田によってどのようにとりあげられているかを，つぎの2点について概観しておこう。

まず日本の経済史乃至経済思想史に関する河上の業績について。河上は『国家学会雑誌』につぎのような諸論文を掲載している。「徳川時代の経済学説を論ず」（明治36年1月），「三浦梅園の『価原』及び本居宣長の『玉くしげ』に見はれたる貨幣論」（明治38年5月），「幕末の社会主義者佐藤信淵」（明治42

↘は精確なことは不明だが，ざっと調べた限りでも河上の著作が彼の処女作『経済学上之根本観念』（明治38年）から福田が歿する4ケ月まえに出た『大衆に訴ふ』（昭和5年）まで合計40点ある。その中には『貧乏物語』や『社会問題管見』や『人口問題批判』のような版のちがうものが2点ある場合もふくまれている。それらの大部分は河上からの福田への贈呈本であることが確認されるようであるが，詳しくは後日の調査にゆずる。

6) 両者の間の学問的交流をさぐる主要なもう一つの資料として考えられるのは往復書簡であるが，河上の側に福田の手紙はのこっておらず，福田の側に河上の手紙がのこっているかどうかは今のところ不明である。だが両者の間に手紙の往復があったことは種々の資料から推定されるし，手紙の内容をある程度つたえている資料もある。たとえば福田の「解放の社会政策」（『改造』大正8年6月号所載，『全集』VI所収）の中のつぎの一節がそうである。「予輩嘗て或雑誌から『日本の誇り』なる題下で意見を徴せられたとき『予は日本人たることを最大の誇とす』と答えた，黒岩周八氏は日本には何の誇る可きものなしと答へられた。河上博士はこの両文を見て予は寧ろ黒岩氏に与みせんとす，日本の如き貧しき国機械応用の発達せざる国に，何の誇あらんやとの意味の一書を予に寄せられた。……河上博士は其後数年渡欧せられたとき，曩時の感想必ずしも正しからざるを発見せりと予に語られたることあり，今は果して再び如何に変ぜられたるやを知らず」（全集VI，1217-1218ページ，同1307ページをも参照。なお全集V，p. 1333にも河上から福田への別の手紙のことがでてくる。）

年10月)。ところで福田もまた『国家学会雑誌』の明治43年6月号に「ボアギュベールの貨幣論と三浦梅園の貨幣論」を書き，その中で河上のこれらの諸論文に関説している。まず福田は，フィジオクラットを重農主義者と訳し，マーカンテリストを重商または重金主義者と訳すことは誤解をともなうとし，その一例として徳川時代の経済学者を重農主義者としてとりあつかうことをあげ，「翻訳の不精密なために丸で縁もゆかりもない二物を同一視するに至っては噴飯に堪へぬ」とのべ，さらに同じことが社会主義についてもあるとして「私は徳川時代には社会主義者はないと感じております。これは河上肇君が『幕末の社会主義者佐藤信淵』という論文を出されましたのを一読致していよいよ所感を強くしたのであります。信淵の所論として河上君の挙げられた所によりますと，彼は社会主義の根本的主張を是認せぬもので，明白に非社会主義者たるの実を示して居るものであります」と書いている。ついでボアギュベール論に入り，彼は富の本質は飯食の資であって貨幣ではないとのべているが，「此等の言は我徳川時代の学者から屢々聞く所と殆んど符節を合せた様であります。太宰純や本居宣長やを比べて御覧なさい。猶河上肇君の書かれた諸論文に引用した所を見られたし」という。そしてボアギュベールの貨幣論の特徴はそこにあるのではなく，(1)クナップの「カルタル・テオリー」と似たところがあり，(2)ジンメルの貨幣比例説と暗合する点があるという二つの点にあることを指摘し，つぎのようにのべている。「右の二点に就てボアギュベールと比較して見て多少興味のあると思はれるのは三浦梅園の『価原』に於て論じた所是であります。三浦梅園のことは河上肇君が国家学会雑誌に詳しく且有力に論じて居られます。其中にボアギュベールの説を参照せよとありますから，同君も此両人の暗合の点は認めて居られるものと思いますが，唯交換用具云々の所丈けに止っていますから，自然私の此の一篇は河上君の御論の補論にもなるかと存じます」。そして上掲の二点について「河上君は第一点に就ては着眼せられて居りながら，それよりもかえってこの第二の点について何故ボアギュベールを参照せよと言はれなかったか不思議に思はれるのであります。それのみならず梅園の折角の

卓説を全文引用せられながら，『彼は所謂貨幣数量説を取れり』とのみ言はれて，梅園の説は殆んど疑のない『貨幣比例学説』であることを一向申して居られないことは甚だ残念な次第であります」とのべ，この点で河上の梅園論を補っているのである[7]。

河上肇は大正元年に刊行した論文集『経済学研究』——本書は河上が外国留学に出発する前に過去10年間の研究を総括する意味でそれまでに書いた論文14を理論篇と史論篇とに二分して編集刊行したものである——の下篇「史論」に上掲の佐藤信淵についての論文と三浦梅園についてのそれとを収録したが，梅園の論文については序文の中で「此の一文の価値を認めて下さったのは福田博士である。博士は近頃『価原』の全文を校訂して印刷に附せられ……且つ之を頒つの序として一文を草せられている，いま其の序文の冒頭を左に記載させていただく」として，福田の文章（これは福田の『全集』に入っていない）をかかげている[8]。その中で福田は「梅園が徳川時代有数の経済学者の一人として数ふ可きものなるを始めて世に示したるは専ら学友河上（肇）教授の効に帰すべし」といって河上の論文を紹介している。河上もまた『経済学研究』の序文で明治43年の福田論文を紹介し，つぎのようにのべている。「梅園の事に興味を有たれた読者には是非一読を願ふ。余が本書に収めた旧稿にもボアギュベールの貨幣論との比較をして置いたのであるが，博士の此の論文を得たるために，そこの部分は編集に際し新たに削除してしまった」[9]。このように河上は，自分の梅園論が福田によって認められたことを大いに多とするとともに，ボアギュベールと梅園との対比についての自説を削除することでそれに関する福田の「補論」にしたがう態度を表明したのであった[10]。

---

7) 福田『経済学全集』III，1376-1391ページ参照。
8) 河上『経済学研究』序文32-33ページ。
9) 同上 35ページ。
10) 河上はその後も三浦梅園に興味をもちつづけ，大正2年に出た『三浦梅園全集』を『京都法学会雑誌』第8巻（大正2年8月）に紹介するとともに，大正3年ベルリンで『価原』のドイツ語訳をすすめていたが，大戦の勃発で実現しなかった。河上『祖国を顧みて』，実業之日本社，大正4年，149-168ページ参照。

つぎに経済学方法論について。河上の論文集『経済学研究』の上篇「理論」の冒頭には「経済学と経済法則」という論文（『国民経済雑誌』明治44年12月）がおさめられているが，これについて『研究』の序文で河上はつぎのようにのべている。本論文は「両三年来屢々余の公にしたる研究法論の最後のものである。研究法に関しては，ここに収めたるものの外，近頃余の書いたものの中には実は次の諸篇がある。(1)帰納的真理の価値の大小（『国民経済雑誌』７の２），(2)真理の進化（同上７の４），(3)経済学研究法に就いて福田博士の教を乞ふ（同上７の５），(4)学理は凡て仮定に立つ（『京都法学会雑誌』５の２）……是等の諸篇は何れも皆今日より見て不満足至極のものであるが，凡て棄つるに忍びないで，遂に最後に執筆した一篇をのみここに収めた」[11]。

このような河上の方法論議は，当初から福田の所説の検討を通じてなされていたから，福田は「河上君に答ふ」（『国民経済雑誌』明治42年11月）でひとまず応答した後，『経済学講義』増訂第３版（明治43年６月）で論点を四つにわけてくわしく解答している。『経済学全集』第１巻に収録された『経済学講義』はその改定版であり，福田は収録に際して河上に対する解答の部分にさらに手を加えている。そこでは四つの論点のうち第３点の「学問の要は因果の理法の発見にあり」という福田の見解に対する河上の批判への反批判には誤りがあったとして省略され，(1)絶対的真理を云々する福田説に対し「学理は仮定に立つ」とする河上説の吟味，(2)演繹・帰納の両学派の別は程度問題だとする福田説に対する河上の批判の検討，(3)経済史を科学としての経済学の一部門とする福田説に対する河上の批判への反論がおこなわれている[12]。これらの諸点についての両者の見解をここで紹介することは省略し，この三点のうち最も根本的な第一の論点について福田が大正15年『全集』第１巻を刊行するに際して加筆した部分に注目しておきたい。それはつぎのような一節であって，われわれはその中に大正中期の頃わが国でも盛んとなった新カント派哲学に対する福田

11）河上『経済学研究』序文２ページ。
12）福田『経済学全集』Ⅰ，229-242ページ参照。

の立場をうかがうことができるとともに，福田の姿勢が，さきに紹介した日本経済思想史での河上の業績に対する学問的先達としての奨励的評価という姿勢から，同じ立場に立つ学問的同志としての同感的評価の姿勢にかわっていることを知ることができるであろう。

「今校訂に際して翻って河上博士の諸文を商量するに及び，予が右答弁を草したるとき未だ我経済学の問題となり居らざりし（一大時弊に対し，博士は其独特の第六感によって予め痛棒を下し置かれたるの感を禁ずる能はず。一大時弊とは，学問殊に哲学万能の臆説の流行是れなり。……実証科学は勿論のこと，哲学もまた河上博士の云はるゝ如く，凡て仮定に立つものにして，博士の言を籍りて云へば，其の絶対普遍妥当のアプリオリなるものも，亦必竟は仮説にして真理にあらず，哲学の進歩とは所詮迷信の発達を指すに過ぎず。博士の言を更に借れば，畢竟如何にするも吾人は到底絶対の真理を悟了するに由なきか，答へて曰く，然り，科学・哲学の範囲に於ては，吾人は到底之れを悟了するに術なきなり。然るを哲学のみ独り絶対の真理を教ゆるものの如くに主張する一部耳食の徒に対しては，河上博士の此言は，さながら万斛の冷水を極熱頭上に注ぐの慨なくんばあらず」[13) 14)]。

---

13) 同上 235-237ページ。

14) 河上の外国留学以前の他の諸労作についての福田のコメントを見ておくと，(1)セリグマン『新史観』の邦訳（1905）について。福田はセリグマンの原著を必読の「好著」として推薦する(『全集』I，1035ページ）とともに河上の訳本を「学問的飜訳の模範」（同V，1841ページ）としている。(2)『経済学原論』（1905）について。福田は本書を，他人の著作の引照や他人の意見が甚だ煩雑であるとともに間々権衡を欠くという欠陥を指摘しながらも「之を我邦従来の経済書の多数と比較するに確かに一段の進境を示し，斯学の新潮流を紹介するに忠実ならんを期するものの如し」とする（同I，292ページ)。(3)「崇神天皇の朝神宮皇居の別新たに起りし事実を以て国家統一の一大時期を劃するものなりと云ふの私見」(『京都法学会雑誌』明治44年1月，『経済学研究』下編に収録）を福田は「此説は余程真相を穿ったものと思はれる」としている（同III，9ページ)。(4)河上「通貨の膨脹は生活難と直接の関係なし」(『地球』第2巻第2号，大正2年2月）に対する福田の反論「通貨の膨脹は生活難と直接の関係なきや（河上肇君の文を読みて)」（『実業之世界』第10巻第5号，同年3月)。これに対して河上は「通貨膨脹，物価騰貴，生活難の関係に就いて福田博士の批評に答ふ」(『京都法学会雑誌』第8巻第4号，同年4月）を書いた。なおこの福田論文は彼の『全集』には収録されていない。(5)河上が「『内外経済学名著』の刊行」(『京都法学会雑誌』大正2年6月）で Utility の訳語を問題にしたのに対する福田の解答「『利用』及び『非利用』なる術語に付て河上教授に答ふ」（同大正2年7月，『全集』IV，1257-1265ページに収録)。これに対し河上は同誌8月号に「福田博士に答ふ（Uitity に相当せる術語に就て)」↗

## III

河上肇が大正4年に帰朝して以降に公けにした諸著作についても，福田徳三はいろいろなコメントを書いている。たとえば河上がヨーロッパに滞在中に『大阪朝日新聞』に寄稿した文章を中心にして大正5年に出版した随想集『祖国を顧みて』について，福田は小野塚喜平次や牧野英一の随想集を論評した際に，つぎのような寸評をくだしている。本書は「一言にして云へば直観的の一産物であって，之を表はすに博士独特の美文を以てしたものである。河津博士は此書には独断的の論断少からずと云はれたが，成程左様云ふ点も認められるが，要するに博士は大なる問題を成る可く小に取扱はんとせられた者と思ふ。故に構論が著しく『エリプチカル』で且つ日刊新聞に載せると云ふ心地を始終持って書かれた為め著しく journalistic になって居る」[15]。また河上が多年京大で講義と研究をつづけてきた経済学史の研究成果をとりまとめた『資本主義経済学の史的発展』(1923) について，福田は「(経済学史に関する) 邦文の書には翻訳書若干……を除いては，学史の書として自家研究を述べるもの殆んど之れなし。唯高橋誠一郎氏に『経済学史研究』あり，河上肇博士に『資本主義経済学の史的発展』ありて，此の欠を補ふのみ」[16] とのべている。

福田の河上の業績に対するこうした好意的な評価は，河上がマルクス主義の立場に移行した後の作品に対してはほとんど影をひそめ，きびしい批判的論評が目立つようになる。たとえば河上が大正8年1月に創刊した『社会問題研究』の第4冊（同年4月）に掲載したマルクスの『賃労働と資本』のエンゲルス版による全訳に対し，福田は『解放』の創刊号（大正8年6月）に「マルクスの真本と河上博士の原本」を書き，河上がマルクスの1849年の論文そのま

---

ゝを書いている。なお後年福田はこの点についてつぎのようにのべている。「私は限界効用を斥けて利用とすること久しいもので，嘗て河上博士から其の不可たることを指摘されたが，私は之を改めない方が宜しいと思って居る。然るに『解放』12年3月号に於て龍本博士も亦効用を斥けて利用とせられているのは一の会心事である」（『全集』Ⅳ，521ページ）。

15) 福田『全集』Ⅳ，1347ページ。

16) 同Ⅰ，144ページ。

まを印刷した版本を底本とせずエンゲルスが1891年に原文を訂正（主としては「労働」とあるところを「労働力」という風に）して刊行した版本を底本としたことをとりあげ，訳者河上のこうした態度は，学問的な見地からマルクスを紹介するのではなくマルクス主義を宣伝しようとするものだと批判した[17]。これに対して河上は，エンゲルス版を底本にしたこと自体がどうしてマルクス主義のプロパガンダになるのか，福田の主張は理解しがたいとしながらも，その改訳に際してはマルクスの原文を底本としてエンゲルスの修正箇所を注記するというかたちにあらためた[18]。また河上が『社会問題研究』創刊号にのせた「マルクスの社会主義の理論的体系(一)」の中で「近頃福田博士は，諸種の新聞雑誌に意見を発表せられ，社会民主主義を以て最も危険なるものと為し，之を撲滅することを以て，我国の使命と為すべきものと論ぜられている」[19]とのべたのに対し，福田は大正8年5月に出た黎明会講演集第3輯に収録されている「如何に改造するか」の中で，「私は社会民主主義を撲滅せよなどと云ふことを言った事はない，対抗せよと申したのです。……互に思想の撲滅，思想の撲滅と言ったら物騒な事である。殊に私は社会民主主義に対しては非常に深い敬意を持っている者であります。敬意を持って居りますけれども，大変な間違があると云ふ事を従来攻撃するのであります」[20]とのべ，社会民主主義はプロレタリアートの階級闘争によってのみ社会主義が実現されるというが，こうした方法を実行することによって「人類が大損失を蒙ることを私は深く恐れる……達する所，目的は同じであっても，途中の道が本当のデモクラシーでなければならぬ。一階級の専横，一階級の凡ての他の階級に対する戦争であってはなら

17) 同IV，1266–1284ページ。

18) 河上『改訳，賃労働と資本』を公にするに際し福田博士に答ふ」，『社会問題研究』第28冊，大正10年12月，971–982ページ。なお福田は別のところで河上が Lohnarbeit und Kapital を『賃銀労働と資本』とせず『労働と資本』と訳したのは「マルクスにとっては迷惑な省略と云はなければならぬ」（『全集』V，348ページ）としているが，河上は改訳版で『賃労働と資本』とあらためている。河上のこうした改訳についての後年の福田の回顧を参照。福田『厚生経済研究』刀江書院，昭和5年，159–160，514ページ。また河上も『自叙伝』の中で福田のこの批判のことにふれている。『自叙伝』岩波文庫(5)，1976年，261ページ。

19) 『社会問題研究』第1冊，19ページ。

20) 福田『全集』VI，1057ページ。なお456ページをも参照。

ぬと主張するのです」[21] としている。福田のこの反論に対して河上は『社会問題研究』第9冊（大正8年10月）に「福田博士の社会民主主義論を評す」を書いてこたえ，「撲滅」という表現をつかった「軽率」を認めるとともに，「撲滅」と「対抗」との間に重大な差異ありとする福田の態度は「理解に苦む」とのべ，さらに「全く其目的と切り離して只其手段をのみ是非せんとせらるる博士」の態度に同じえない所以を説明している[22]。ここには両者のマルクス主義に対する立場の相違がはっきりと顕在化しているといってよいであろう。

マルクスの労働価値論や資本蓄積論に関しても河上と福田との間には大きな見解の相違があった。前者について福田は，『改造』大正12年3，4，6月号に寄せた「リープクネヒト獄中遺稿，マルクス価値論批評」の中で，リープクネヒトやレキシスやボェーム・バヴェルクのマルクス批判を参照しながら「価値，余剰価値から価格と利潤とを導き出さんとするマルクスの企ては失敗に帰したものと云はねばなら」ないとのべ，『資本論』第1部と第3部とには矛盾はないとしてマルクスを擁護するゾンバルトやコッペルの所説を斥け，さらに河上の「マルクスの労働価値説（小泉教授の之に対する批評について）」（『社会問題研究』第39～41冊，大正11年11月～12年1月）もまた「実はゾムバルト，コッペル等の旧い失敗の試みの復興――其れとしても甚だ無造作なる――に外ならぬ」として，河上のマルクス解釈を批判している[23]。また後者については，福田が『改造』大正10年10～11月に寄稿した「資本増殖の理法と資本主義の崩壊」において，『資本論』第2部第三篇の再生産表式論をとりあげ，ツガン・

21）同上，1054-1057ページ。

22）『社会問題研究』第9冊，293-323ページ。こうした河上と福田との論争を雑誌『改造』は大正8年12月号，大正9年2月号の二度にわたってとりあげ，福田が大正8年末の社会政策学会第13回大会でおこなった「労働組合と階級戦争，併せて河上博士に答ふ」という講演を（『国民経済雑誌』第28巻第2号，大正9年2月に要旨がのっている）めぐって室伏高信や新居格などの論客がコメントし，最後に大正9年3月で山川均が「『河上・福田問題』の総勘定」を書いた。福田は河上をはじめとするこうした人々の論評に対し，「マルキシズムとしてのボルシェヴィズム」（『解放』大正9年10月，11月，『全集』V，1043-1123ページ）でこたえるところがあった。なお『全集』V，30ページ，同VI，1410ページをも参照。天野敬太郎編『河上肇博士文献志』194ページ。「対福田徳三氏――『社会民主主義』論争」の文献リストは若干の補充を要する。

23）福田『全集』IV，563-565ページ。

バラノフスキーが『マルキシズムの理論的基盤』(1905年)でおこなった推算を援用しつつ「マルクスの所謂拡張再生産は無限に増大してゆく」とのべ，マルクスの指摘した資本主義の矛盾は，実は「資本制生産に内在するものではない，資本制生産の範囲を超えた彼方にあるものと其範囲内の目的との内外の矛盾衝突である」と主張した[24]。これに対して河上は「資本主義的生産組織の真相，その下に於ける生産力の分配，之に含まるる矛盾の増進」(『社会問題研究』第30冊，大正11年2月)に於て，消費過少説の立場から資本主義の内在的矛盾の必然性を主張し，その見地から前掲の福田論文を批判した[25]。河上はさらに「福田博士の『資本増殖の理法』を評す」という長篇の論稿(『社会問題研究』第31—34冊，大正11年3—6月)で福田のツガンに依るマルクス再生産表式論を詳細に吟味し，ローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』(1913)で自分の消費過少説的立場を補強しつつ，「生産手段は消費資料を生産するための手段として役立つことに於て始めて意味を有するものであるから，生産手段の生産増加は必然的に消費資料の生産を増加すべきこと……従って福田博士が，消費資料の生産は減少しても，生産手段の生産は無限に拡張されてゆくものだと主張されるのは誤解でなければならぬ。……(博士は)ツガンはマルクスの資本複生産の理論に立脚していると称せられるが，それはマルクスの理論の誤解に立脚しているに過ぎぬ」という「結論」[26]をみちびき出した。福田はこの河上論文に対して特に一文を草して反論することはなかったが，「資本の自己拡大……の傾向には，内在的には一の制約をも有しておらぬ」という立場を堅持し，「河上博士の甚だ有力なる非難——度々繰返して力説せられたる——あるにも拘らず，資本経済内在矛盾説に極力反対する」ことを，機会あるごとに明言した[27]。

24) 同V，463-534ページ。

25) 『社会問題研究』第30冊，1045-1081ページ。なお河上「福田博士の『資本増殖の理法と資本主義の崩壊』について」，『我等』第4巻第3号，大正11年3月をも参照。

26) 『社会問題研究』第34冊，1229-1230ページ。

27) 福田『全集』V，186ページ，同VI，1841-1842ページ。なお『全集』I，758-759ページをも参照。そこで福田は「予の説を以て悉くトゥガン・バラノフスキーを祖述するものの如く解」↗

私はここで資本蓄積に関するこの福田・河上論争――それは後に河上肇と高田保馬との論争に進展する――の理論的内容に立入るつもりはない[28]。ここでのべたいことは，従来あまり注意されなかったこの論争の一側面，すなわちこの論争には河上の『貧乏物語』に対する福田の批判という意図がこめられていたということについてである。節をあらためてこの点をみることにしよう[29]。

## IV

福田が河上の『貧乏物語』に最初にふれたのは，おそらく大正6年5月の『日本評論』に寄せた「金の経済と物の経済」であって，彼はその中の「『金の経済』の組織欠陥」の中で，『貧乏物語』が現在の経済組織の欠陥を「甚だ趣味深く説明して居られる」とのべ，現在の経済が計画的に運営されていないために「河上博士の云って居る通り，生産と云うことが甘く調節され，按配されない，金持の贅沢のために貧乏人に取っての必要品の生産力が減殺されるような傾向を呈する。されば富者は或る程度以上は其の贅沢を止める丈けの自制力があって欲しい。併しながら之れは望んで実行し得らるることは先づ以て困難である」と書いている[30]。ここでは最後の文章に河上の主張への批判がこめ

---

↘する河上に対し，自説の骨子はすでにツガンとは関係なく『続経済学講義』（大正2年）で展開してあるとのべている。

28) この論争については山田盛太郎「再生産過程表式分析序論」（改造社版経済学全集第11巻），昭和6年，復刊昭和23年），同「わが国における経済学発展の特異性（日本学士院創立百年記念講演集，1979年3月），柴田敬『理論経済学』上（弘文堂，昭和10年）第3章生産連繋論を参照。

29) ここで，『貧乏物語』以外の河上の留学以後の著作についての福田のコメントの中でこれまでとりあげなかったものをあげておこう。(1)河上「剰余価格の成立」（『経済論叢』第7巻第1号，大正7年7月）および「剰余価格論につき高田博士に答ふ」（『社会問題研究』第43冊，大正12年3月）について。福田『全集』II，909ページ，同IV，523-566ページ。(2)河上「唯物史観の公式劈頭の一句について」について。福田『唯物史観経済史出立点の再吟味』（改造社，昭和3年）の「『唯物史観公式』なるものに於ける『アインゲーエン』なる語に関する河上・福本両氏の解釈について」（22-35ページ）。(3)河上・宮川共訳『資本論』（岩波文庫）の等価形態論にでてくるアリストテレスからの引用文の邦訳について。福田「アリストテレースの『流通の正義』――河上博士等訳資本論中或重要なる不正確又は誤謬について」（『改造』昭和2年12月―3年4月，『厚生経済研究』所収）。これに対して河上は「反動学派の陣営における窮余の一戦術としての事実の虚構――拙訳資本論に対する福田博士の非難について」（『社会問題研究』第84冊，昭和2年12月）をかき，さらに福田が「河上博士の『真摯なる態度』と『事実の虚構』」（『改造』昭和3年2月）でこれに応酬した。

られてはいるものの，全体としては肯定的な調子での引用といってよいだろう。ところが河上が『社会問題研究』を創刊した大正8年以後になると，『貧乏物語』への福田の言及には批判的な調子が強まってくる。たとえば福田が大正8年5月に大阪でおこなった黎明会の講演「虚偽のデモクラシーから真正のデモクラシーへ」の中で「河上博士の有名なる文学書の貧乏物語」にふれているのだが，『貧乏物語』を「文学書」とよんでいるところにすでに福田の批判的態度がうかがわれる。この講演での福田の批判の要点は，需要は本で生産は末であるから，金持ちが贅沢品の需要をとり止めれば生活必需品が豊かになるという河上の所論は「其前提に於て少し無理がある」，「河上博士の言の如く贅沢品の生産に費す労力資本全部が社会有用の生産に費さるるとしても，生産は矢張り足りない，矢張り乏しきを憂へなければならぬ」，「金持に贅沢を止めよと云っても決して止めるものではない」などがならべられていて[31]，決して十分ととのったものではない。これにくらべると「解放の社会政策」(『解放』大正8年6月号)での批判はよりととのっている。福田はそこでまずイギリスのハートレー・ウィーザースの『貧乏と浪費』(1915)の所論，すなわち「もし今日の浪費奢侈を制限するならば，従来之に向けられたる生産力は生活の有用資料に向けられて其結果貧者の貧乏を大に緩和することとなる可し」という説を紹介してこれを「生産力解放説」となづけたうえ，「河上博士は即ち此種論旨を取りて有名なる学問詩『貧乏物語』を作られた」とのべ，河上の所説が決して独創的なものではないことを指摘した後，この説に対してつぎのような批判をくだしている。第一に，「此種の説は生産力の十分を前提とするものであると共に，奢侈浪費から有用資料生産への転換が可能なりと前提するものである」が，この前提には疑問がある。第二に「仮りに生活資料の十分なる生産が可能なりとするも，労働の不安，不平，階級の憎悪を決して取り去らるるものではない

30) 福田『全集』VI，659-660ページ。なお米騒動について福田が書いた文章の一つである「極窮権の実行」の中で，騒擾をおこした人々を福田は「河上博士の所謂貧乏線の近所に彷徨して居る人々」としている。同788ページ。

31) 福田『全集』VI，1142-1144ページ。

と思ふ。貧乏は第一には経済上の不足であることはホランダーの説を取られた河上博士の見解に異存を有せぬ。しかしながら経済上の不足のみが今日の貧乏の全部ではない。……貧乏の悪たるは物質上のみではない，否心理上に於て更らにより大なる悪たるのである」[32]。ホランダーというのはアメリカの経済学者で『貧乏根絶論』（1914年）の著者であり，『貧乏物語』の中に前出のウィーザースとともに1ケ所ずつ引用されている[33]。

この二つの批判点のうち後者について福田は，「戦後当面の重要経済問題」（『中国民報』大正8年6月）でもふれ，たとえ河上の唱える富者の奢侈欲自制による貧乏退治が成功したとしても「社会上の不平が決してなくなるものではない」[34]とし，また「労働非貨物主義の公認」（『改造』大正8年7月）でも「労働問題の根柢は単に労働者の貧乏に存するのではない。河上博士が『貧

32）同IV，1153-1254ページ。

33）北沢新次郎は1915年にアメリカ留学から帰ってしばらくたった時，福田徳三にたのまれて著者のホランダーからもらってきた『貧乏根絶論』を数日貸したと書き，つぎのようにのべている。「福田先生は，たしか雑誌の『改造』であったと思うが，このころ出版された河上肇先生の『貧乏物語』にたいして，『『貧乏物語』は河上博士の着想ではなくてホランダーの翻訳にすぎない』という意味の批判を書かれてしまった。これにたいして河上先生は，あのとおり純情なかただから『どこが翻訳なのか』と駁論され，大論争になった。実際はもちろん翻訳ではなく，一部にオーバー・ラップした個所があっただけなのだが，とにかくあの喧嘩の材料を私が提供したことになってしまった」（『歴史の歯車――回想80年――』，青木書店，1969年，53ページ）。北沢がここでのべている『改造』にのった福田論文というのは「資本増殖の理法と資本主義の崩壊」のことであろう。たしかにここで福田はある点で河上がホランダーの説に依っていることを指摘してはいるものの，『貧乏物語』そのものの着想がホランダーのかりものだとはのべていない（その点ではむしろウィーザースによる所が大きいことが指摘されている）。また河上の福田への反論もホランダーとの関係を問題にしたものでは決してなかった。ただこうした北沢の回想を念頭において『貧乏物語』をよむと，『貧乏物語』におけるホランダーの引用の仕方には問題のあることに気付かせられる。すなわち，河上は「3の3」でホランダーの著書の巻頭の文章を数行引用し，貧乏の存在が社会不安の中核だというその主張に「余も全く同感である」とのべている（岩波文庫41-42ページ）が，実は第1節で河上が貧乏に「経済上の不平等」，「経済上の依頼」，「経済上の不足」にもとづく3種を区別し，その中で最も重要な貧乏は第3のものだとしているところにそのホランダーを引用すべきであった。economic unequality, economic dependence, economic insufficiency による三種の貧乏を区別したのはホランダーであった―彼は河上が引用した文章につづいてこの点を説明している―からである。福田はホランダーの原文と『貧乏物語』とを照合して貧乏の区別と第3の貧乏の重視とがホランダーによるものであることを知り，そのことを北沢に話したのではなかろうか。なお北沢はその後ホランダーの著書を邦訳している。北沢新次郎・小島幸治共訳『貧乏根絶論』，大学評論社，大正7年。

34）福田『全集』VI，1284ページ。

乏物語』を著して社会問題の根本は貧乏に在りとの説を大に力説せられて以来，我邦では貧乏の重要に着目する人の殖えたは誠に結構の事ではあるが，貧乏が社会問題の根本なりと思うのは大なる謬見である。此点に於て私は極力河上博士に反対せざるを得ぬものである」[35] とのべている。この論点は人間を所有の専制から解放して創造力を発揮させることが枢要であるとし，労働運動も賃金斗争から厚生斗争に高まるべきだとする福田の人格主義的厚生経済論的社会改良論にかかわるもので，思想家福田にとっては唯物論的社会革命論に加担する河上と根本的に相容れない世界観の核心とむすびついているという意味できわめて重要である。だが経済学者福田としては，こうした思想的批判にとどまらず，それを経済学的に基礎づけ補強する必要があった。そしてこのことは『貧乏物語』に対する第一の批判と関連するのであって，河上との蓄積論争の出発点となった「資本増殖の理法と資本主義の崩壊」は，そのような意味での『貧乏物語』批判という側面をもっていたといってよい。

この福田論文は前述したようにマルクスの再生産表式論の意義をとくことから出発するのだが，福田によれば，マルクスは「生産料と消費料との間における出入推移に立脚する資本再生産の複雑なる作用を明かに示した」ことにより，正流派経済学の誤り，すなわち「資本の形成が生産の方向を支配する作用に就て，唯だ資本の形成に充用せられず，企業者の手に於て直接消費の用に供せらるる享楽財と，資本の形成に充てらるる可く労働者生計の料となる財との対立又は角逐のみを見る……旧来の蒙説に致命傷を与へた」。しかるに今もなお「労資対抗の現象を，単に資本形成用の労働者生計用と企業者直接消費用の享楽財との対立を以て説く人の甚だ多（く）……殊に社会民主主義を奉ずと称し唯物史観を信ずと称する学者にして尚且つ然ること」はどうしたことかと福田はいう[36]。この学者の中に河上が含められていることは想像に難くないであろう。このことは上掲の引用文中「企業者の手に於て直接消費の用に供せられた

35) 同VI，1371ページ。
36) 同V，465ページ。

る享楽財」の部分を後にみずから引用する時「ウィーザース及河上博士の所謂奢侈」と注記している[37]ことからもあきらかであるが，その他にもこの論文の中で福田は2ケ所河上について，しかもいずれも『貧乏物語』の所説に言及している。すなわち，第一に，マルクスの再生産表式論が2部門分割の他に更に第2部門の中を資本家のみの消費する奢侈品の生産業と生活必需品生産業とに分け，その差異を詳論したとのべた後，「此の研究のあること等殆んど或は全く知らない金融経済学者ウィーザースの『貧乏と浪費』等は，言ふまでもなく遼東の豕であるが，河上博士が若しその一代の名著『貧乏物語』の着想を，マルクスの右の研究に立脚せられたなら，必ずしも『貧乏物語』の絶版を急に決行せられる必要はなかったであろう，誠に惜しいことをしたものである」とされる[38]。第二に，資本主義における流通生活は「全く生産の支配の下に活動している」のだから，「タトヘ労働者の得る賃銀総額は絶対的に増進するとも……年々の生産総額に対しては相対的に段々減少してゆくのである。労働者の消費不足は事実であっても事実でなくても，此点に何等の関係はない。資本家の自己消費は無論著しく増大した，然し生産額の資本化，生産要具化の割合の増大には遠く及ばない」とのべた後に，福田はつぎのような文章を挿入している。「此点に於てウィーザース並に河上博士が資本主其他の奢侈品消費の減少に甚だ重きを置くことの殆んど赤手海水を汲む底のことたること疑を容れまい」[39]。

福田はこのように『貧乏物語』の議論の前提となっている河上の経済論が古典学派的な謬論に根ざしていることを指摘するとともに，マルクスの再生産論を更に発展させたツガンの理論によって，消費過少説の論者がいうような資本主義がその内在的矛盾によって崩壊するという主張が誤りであることがあきらかになったとし，真の矛盾は資本主義に内在するものではなく，「資本増殖の無限発展と人間の真正なる厚生発展との衝突」にあるとする。そして「この根本的矛盾の除去とその為の運動としての労働運動を唯物史観に囚はれた謬れる

37) 同V，532ページ。
38) 同V，488-489ページ。
39) 同V，529-530ページ。

楽観より解き放ち，之れに真正なる帰趣を指示する」[40] ことに社会政策学の課題があるとしてこの論文を結んでいる。

見られるように，福田はこの論文で，河上の「一代の名著」たる『貧乏物語』の前提となっている経済理論には誤りがあること，またその貧乏観には唯物史観的に毒された偏向があることとを明らかにすることにつとめるとともに，それに対照させるかたちで自己の資本蓄積論や厚生哲学的社会政策論の特質をうち出そうとした。その意味でこの論文は福田・河上論争の中でも特別の意味をもっているといってよいであろう。なればこそ河上は，これにこたえる最初の論文（『社会問題研究』第30冊）で，すでに絶版にしていた『貧乏物語』をわざわざ引き合いに出し，経済問題についての基本的見方については今も不変であるとするとともに，自分の立場をあえて「消費過小説と称されているものに略ぼ相当する」と規定し，福田の批判を真正面からうけて立つ姿勢を明確にしたうえで，『社会問題研究』の第31冊から第34冊までの全4冊の紙面をすべてうずめる長篇の論稿でこれにこたえたのであった。

## V

1928年（昭和3）年4月18日，河上肇は京都帝国大学教授を辞任し，その辞職の理由をその日の新聞に発表した。それを読んだ福田徳三——当時彼は『資本論』の訳語をめぐって河上と論争をまじえていた（本稿注29の(3)を参照）——はその感想を「笛吹かざるに踊る」と題して同年4月24—5月8日の『東京朝日新聞』に掲載した。福田はこの声明書を「博士が今また筆をとって公けにされた諸文章中一傑作に属する」もの，「いはゆる情理並び到る」この文章は「名文家の博士としても又得易からざる名文」とのべ，さらにこうした文章は「内に省みていささかのやましいところない」者のみが書きうるとして，「理義明晰にその出処を明かにされた」河上の態度をたたえるとともに，京大総長のあげた辞任止むなしとする三つの理由を逐一吟味してそれらが「形式的

40) 同V，535ページ。

にも実質的にも何等の意味を有たざるものである」とのべ，文部当局の強要に屈して河上を辞任にいたらしめた京大当局をきびしく批判した。その中でとくに注意すべきところはつぎの一節であるように思われる。河上が京大教授としてマルクス経済学を講義することによって多くの学生を危険思想に赴かしめたがゆえに，彼を辞任させるべきだということになるだろうかと福田は問い，断じて否と答える。先ず福田は，大学でマルクス経済学をその立場に立って講義する場合，自分はマルクスに賛成するがこれには反対説もあるとしてそれを紹介するだけの用意があるべきだとのべ，自分は河上がどういう講義をしているかは知らないが，最近の河上の労作について見るかぎり「博士のこの点に対する態度は決して遺憾なきものといふことを得ない」とする。それではもし河上の講義が最近の労作と同じくマルクス説に対して「ほとんど信仰の域に入って」いるとすればどうか。それでも「博士をして京大教授の地位を去らしむべき理由は寸毫も存しない」と福田はいう。もし非マルクス的立場から原論を河上とならんで講義する教授がいるとすれば「大学教授として河上博士が多少偏した講義をせらるるとも大学としては一向差支ないことである」。京大は河上を辞職させるべきでなく，河上とともに原論を担当してきた論敵田島錦治の退官後の後継者として「感化の絶大なる河上博士と善く対抗し得べき有力の学者を得る」ことにつとめるべきであった。「然るに何事ぞ京大の当事者は左手が欠けたからとて右手を絶つ底の軽挙を敢てして，マルクス学の第一人者たる河上博士を退職せしめた。私はまず第一に，これを我邦学問の進歩のために痛惜おく能はざるものである」[41]。こうした叙述の中にわれわれは，河上の人となりを「二十余年にわたる学交の間において熟知して」いる福田の，そして大正デモクラシー期の思想的リーダーの一人であったリベラリスト福田の心情をよく汲みとることができるであろう。

福田徳三は昭和5年5月8日に病歿するが，「博士逝去の日の夜二時過認む」と末尾に書いた「福田博士の思い出」という河上肇の文章が『改造』の同

41) 福田『厚生経済研究』，502-511ページ。

年6月号に掲載された。河上はその年の1月居を京都から東京にうつし，労農党の党員として多忙な日を送っていて，福田が入院していることを新聞で知り，見舞の電報を出したがすぐ「厚意有りがとう，危篤にあらず」という返電がきたので，「追々快方に向っていられるのかと思っているうちに，今日思い掛けなく訃を伝へられた」と河上はその文章の中で書いている。そして彼が「大学を卒業して間もない頃」からはじまった福田との長きにわたる交友の跡を回顧しつつ，福田から「私は少からず学恩を受けている」こと，また「吾々は幾度か論争を重ねたが，それは私的の交際には少しも影響しなかった」ことをのべ，最後につぎのようなことばでこの追悼文をむすんでいる。「博士は自ら『僕はブルジョア学者だが』と私に言っておられた。そのブルジョア学者としては，今日まで日本にあっては最も有能な最も博識な学者であった。そして恐らく博士は永く斯かるものとして残られるであろう。何故ならば，ブルジョア経済学は既にその進歩を否認されており，社会の情勢が到底博士以上のブルジョア経済学の成長を不可能にしているから」[42]。マルクス主義者として政治的実践をはじめていた河上はすでに福田とは全く別の世界の人となってはいたが，福田の死はやはり河上にとって格別の感懐をさそうものがあったであろうことは，おそらく匆匆の間にしたためられたこの短文からもうかがえよう。河上は，福田に対する親愛の思いをこめて，彼に最もすぐれた敵という評価をこの追悼文で下したのではないであろうか。

42) 天野敬太郎編『河上肇随想録』，河出新書，昭和31年，169-170ページ。